

孫たちへ言い残すこと

ユウちゃんとコウちゃんへ —

酒井 武史

ここには、オジイチャンがこどものときに、自分と自分の家族に起こったことが書いてある。

きみたちはいま5歳と3歳半だから、この文章を読んで理解できるようになるのは、あと数年は先になるだろう。その時になっても、オジイチャンはたぶん元気であるかもしれない。でも、オジイチャンはもう70歳、いつなにか起きてても不思議はない。だから、いまのうちに書き残しておこうと思う。

実はここに書いたことは、いままできみたちのチチ・ハハやオバアチャンにもきちんと話したことはない。たまたま方正友好交流の会事務局の大類さんおおるいから、原稿の依頼があったので、その機会を借りることにした。大類さんには感謝します。

文章のなかで、「ぼく」とあるのはオジイチャンのことだ。「父」「祖父」などはぼくとの関係で、きみたちからみると「ひいオジイチャン」「ひいひいオジイチャン」ということになる。

ぼくが生まれたのは1938年12月。日本は中国と戦争をしている真っ最中だった。

歴史を少しさかのぼると、1931年に「満州事変」が起こり、日本の軍隊は満州（いまの中国東北地方）全土を支配した。1937年には「蘆溝橋事件」ろこうきょうが起こり、日本と中国の本格的な戦争が始まった。1941年にはアメリカやイギリスなどの連合国との戦争を始めた。そして、戦争は1945年8月15日、日本の敗戦によって終わった。

この戦争については、「日中戦争」「大東亜戦争」だいとうあ「太平洋戦争」「第2次世界大戦」などいろいろな呼び方がある。「満州事変」から敗戦まで15年つづいたから、「15年戦争」といういいかたもある。ここでは「15年戦争」にしよう。

15戦争のあいだに、実に多くの人々が死んだ。きちんとした統計があるわけではないが、日本人だけで、軍人とそうでない人をあわせて230万人が死んだともいわれる。原爆の犠牲者だけで広島23万人、長崎7万5000人、東京、大阪の大空襲でもたくさんの犠牲者がでた。方正県ほうまさきに建立された日本人公墓に葬られた5000人も含まれる。こんな大きな数字をならべてもピンとこないかもしれない。

しかし、この数字のなかにぼくの身内、つまりきみたちの身内が6人含まれるといたら、すこしは実感がわいてくるだろう。

その6人がいつ、どこでどのように亡くなったのか。亡くなった順にあげる。

義弘＝父、1940年9月26日、中国河北省で戦死。25歳。

時期はいつかはっきりしないが、父はぼくがまだ母のお腹にいるとき、軍隊に召集され、中国大陸に派遣されていた。父は中国から母に手紙で生まれてくるこどもの名前、男と女の両方の候補を知らせてきた。だが、けっきょく父はぼくの名前をつけただけで、ぼくの顔はいちども見ないで死んでしまった。

入隊する前、当時東京・渋谷に住んでいた父母が2人で最後に見た映画がアメリカの『オーケストラの少女』だったそうだ。この映画が日本で公開されたのが一九三七年一二月とあるから、たぶん入隊もそのころだったと思う。父母は映画を見たあと、これで東京は見納めになるかもしれないと思い、山手線（いまのJR、当時は省線といった）をなんども回ったそうだ。そのとおりに、父がふたたび東京をみることはなかった。

＊

真司（叔父、1942年8月21日、中国山東省で戦死、21歳）

父・義弘は7人兄弟の長男で、真司叔父は3男だ。この叔父さんが戦死したとき、ぼくは3歳だったから、叔父さんのことはおぼえてない。ただ、とてもやさしい人で、ぼくをかわいがってくれたそうだ。

父につづいて叔父さんも戦死した。さすがに一家で2人も戦死者を出すというのは当時でもめずらしかつたらしい。「お国につくした名誉ある家」ということで、祖父母の写真つきで、小さな新聞記事になった。祖母が持っていたその切り抜きを一度みた記憶がある。印刷が悪かったせいもあるが、2人の表情がとても暗かったのが印象に残っている。

父が戦死したとき、次男は他家に養子にでていたから、祖父母は真司叔父をととても頼りにしていた。それだけに、真司叔父の戦死は、祖父母、とくに祖父にとってよほどショックが大きかったのだろう。祖父はまだ定年（という言葉が当時あったかどうか定かではないが）にだいぶ間があったのに、勤めていた女学校の教師をやめてしまった。それ以後、祖父の笑顔はみられなくなった。

＊

加市（祖父。1945年6月20日、豊橋が空襲されたとき死亡、52歳）

1944年ころから、日本の都市がアメリカ軍の爆撃機により空襲を受けるようになった。1945年4月、ぼくは国民学校（いまの小学校）に入学した。父の実家のある豊橋市前田南町というところに、祖父母といちばん年下の哲治叔父さんの4人で暮らしていた。

母はどうしたのかと不思議に思うかもしれない。実は父が死んだとき、ぼくは母と二人で満洲で暮らしていた。母と祖父母とは仲が悪かったから、一緒に暮らすのは無理だったのかもしれない。くわしいいきさつはわからないが、ぼくが2歳のとき、母はぼくを酒井の家へおいて満洲へ帰っていった。それ以後、母との関係は一切途絶えた。ぼくが母と再会するのは、ぼくが中学1年のときだった。

1945年6月19日深夜、アメリカ軍の爆撃機の編隊が豊橋を襲った。空襲が始まって、すぐに祖母と叔父さんと僕の3人は玄関の外に出て、祖父がくるのを待っていた。家の前の道路を避難する人がどんどん通りすぎていく。約2キロ東の郊外に向山緑地があり、

みんなそこに避難しようとしていたのだ。西の空は夕焼け空のように炎で赤くそまり、深夜のはずなのに外は明るかった。なかなか出てこない祖父をまちきれず、祖母と叔父さんはぼくを乳母車に乗せ、向山にむかって走り出した。乳母車のなかから前がよく見える。もう焼夷弾しょういだんが落ちてきていて、道路のところどころが燃えていたが、そのなかを突っ走った。

向山の高台につくと、そこから炎と煙につつまれて燃え上がる豊橋の町の姿がよく見えた。

翌朝、祖母が自宅を見に行き、全焼した我が家の焼け跡から祖父の焼死体しょうしたいを発見した。戦死した父と叔父の写真が飾ってあった部屋の付近で亡くなっていたそう。祖母は後に、ひょっとして祖父は逃げる気がなかったのではないかと、言ったことがある。

豊橋市の資料によると、この空襲による死者は624人、全焼・全壊家屋1万5866戸とある。

*

光子（叔母、28歳）、浩一郎（叔母の長男＝いとこ3歳）、千秋（同次男＝いとこ、1歳6カ月）。1945年8月14日、旧満州で起きた葛根廟かっこんびょう事件で遭難。

光子叔母はぼくの父方のただひとりの叔母さんだった。当時、旧「満州国」の興安こうあん（現在の内モンゴル自治区ウランホト）にこども二人と暮らしていた。夫の佐七叔父さんは、数カ月前、軍隊に招集されていた。

1945年8月9日、ソ連が日本に宣戦を布告、「満州国」に侵攻してきた。満州に在住していた日本人は祖国をめざして逃げまどい、その間に多くの悲劇が生まれた。葛根廟事件はそのもっとも悲惨な例だ。

この事件については、事件に遭遇し生き残った大楠戊辰さんおおくしつちやという方がすぐれたルポルタージュを書いているので、以下の話はその本を参考にしている。

8月11日午後4時、興安在住の日本人約千数百人が行動隊を組織し、40キロ離れた葛根廟を目指して徒歩で移動を開始した。そこから列車でさらに南下するという計画だった。叔母さんは3歳と1歳半の幼児をつれての避難だったから、よけたいへんだったろう。

8月14日昼ころ、行動隊が葛根廟丘陵付近まで到達したところへ、待ち受けていたソ連軍の戦車部隊が行動隊に対し攻撃を開始した。銃撃されたり戦車に直接ひき殺されたりして、女性、子供を含む1000人以上が殺された。そのなかに叔母さんたちも含まれていたのだろう。「だろう」というのは、だれも遺体を確認したわけではないからだ。

翌8月15日敗戦。6月の豊橋空襲のあと、わたしたちは祖母の実家のある遠州灘えんしゅうなだに面した村に疎開していた。叔母たちの消息はもちろんすぐにはわからなかった。戦後、2、3年たったころだったと思う。わが家でとっていた読売新聞に葛根廟事件で生き残った人の記事がでたことがある。祖母をそれを見て、叔母たちのことはあきらめた。

叔母の夫、佐七叔父さんはソ連の捕虜ほりゆうとなって戦後シベリアに抑留よくりゅうされ、1949年に日本へ帰ってきた。もちろん、そのときはじめて自分の妻とこどもたちの悲劇を知った。

叔父さんはもう20年も前に亡くなったが、亡くなるまで妻子の消息を尋ねていた。あきらめきれなかったのだろうね。

実はこの事件で生き残った子供たちが何人も中国人に保護され、中国残留孤児となっていたことが後の調査で判明している。いそこたちはそのなかにはいなかったようだ。

ぼくの身内から出た戦争犠牲者の話はこれでおしまい。

さて、さいごにきみたちにお願ひがある。いずれきみたちも学校でこの戦争について学ぶことだろう。そのとき、たんに歴史のひとこまとして学ぶだけでなく、いままであげた6人の身内の運命を重ね合わせてほしい。そして、想像力を最大限に働かせてほしい。

たとえば――『オーケストラの少女』はいまではDVDでみることができる。ときどきテレビでも放映してくれる。

暗い映画館のなかで、まだ20歳を少し過ぎたばかりの夫婦が、ギュッと手を握りあつて、スクリーンを見つめている。二人で映画を見るのはこれが最後になるのではないかと思ひながら……。そして、ほんとにそうだったんだ。

(さかいたけし：朝日ジャーナル編集部などを経て、朝日新聞社の定年を待たず退職して、1988年、照代夫人と共に、「自分たちの出したい本を、読者とともに楽しみ考える本を」と、武照舎を創立、現在は出版活動の版元を創土社に移している)